

あとがき

この本を書くのには苦労しました。構想はよかったと思います。いろいろな方に構想を話してみると、皆さんが「それは素晴らしい!」「完成を楽しみにしていますよ!」と喜んでくださいました。特に日本学校教育相談学会山形県支部の理事長・佐藤節子先生をはじめとする皆さんには、二日間の研修会で、この本をテーマにグループワークを行っていただきました。その中でアイデアをたくさんいただきました。

しかし、書き始めると進みません。構想は二転三転。そして、五里霧中。締め切りが近づき、七転八倒。今だから、笑えますが、本当に苦しみました。

その苦しみの中で、大きな気づきを得ました。それは「奥義は基本にあり」でした。武道の世界の言葉です。「技の多きを誇るなかれ」の戒めもあります。

当初、私はカウンセリングや教育相談のさまざまな技法を一つ一つ取り上げて、それがアクティブラーニング型授業にどのように活用できるかを書こうとしていました。しかし、筆が進みません。打ち合わせを繰り返していくうちに、気づきました。私は、そんなにさまざまなスキルを意識的に使っていたわけではないということでした。

まれには、「〇〇法」と呼ばれるスキルを使っていたと言える場面もあります。しかし、それらはあとで考えてみれば、です。実際の授業の場面では、目の前の子どもたちのことを大事にしているだけです。せいぜい「子どもたちの話をよく聴こう」「子どもたちの気持ちを大事にしよう」だけだったのです。

宮本武蔵は「五輪書」の中で「剣の極意はついに振りかぶって振りおろすのみ」と記しています。その基本をひたすら繰り返すことが技を身につけることです。武蔵はこうも書いています。

「千日の修行をもつて鍛とす、万日の修行もつて錬とす」

不思議なことに、第2章のもとになっている文章は、私が新しいアクティブラーニング型物理授業を始めてから、千時間程度繰り返し、ようやく形が定まったと感じていたころの文章です。千回の繰り返しは一つの区切りのような気がします。

皆さん、たゆまず繰り返し返してください。基本を意識して繰り返し返してください。「奥義は基本にある」のですから。

二〇一六年四月

小林昭文